

特発性側弯症の保存的治療（入門編）

あとがき

瀬本 喜啓

あとがき

この本は論文ではない。手引き書である。

論文のように客観的に書いたものではない。

私は約25年間大学病院の医局に属し、徹底的に主観を除いた論文を書くよう訓練されてきた。しかし、論文の内容は客観的になればなるほど人間味がなくなるものである。当然のことであるが、論文は初めから「人間味」を排除して書いたものだからである。

しばしば何を言っているのかすぐにはわからない難しい論文もある。手引き書でも不確かなことは一切書かないというものもある。しかし私は、側弯症を学問の対象としてではなく、病気の子供とそれを心配する両親がいるという極めて人間的な一面を大事にして治療してきた。

このような思いから、1-2回読めばすぐ内容が理解できるような手引き書を作りたいと思った。しかし側弯症そのものが難解な病気である。若い先生方がとっつきにくいと感じるのも無理はない。長い大学生活でしみついた、狭く深く物事を追及するという姿勢を変えるのはなかなか困難であったが、本書では論文には厳禁である私感や希望についても私なりの意見を述べている。

わかりやすいようなことば（話し言葉であれ、書き言葉であれ）を、可及的に（すなわちできるだけ）交えることにした。書き言葉になじんでおられる先生には、「幼稚な言葉」と見えるかも知れない。しかし、側弯症の保存的治療を多くの方に理解していただくために、あえて話し言葉を交えた。本書は側弯症の保存的治療を始めたい整形外科医や、さらに勉強しようと思っている整形外科医、体操療法をめざす理学療法士、体操に疑問を感じている理学療法士、装具の作製方法に悩む装具士を対象とした。

Dr. Blount の名著「ミルウォーキーブレース」（医学書院発行、山内 裕雄訳）を数十年ぶりに読み直した。その中には18ページ（12%）に及ぶ体操療法が書かれている。また48ページ（31%）が実際の装具の作製方法である。全部で156ページしかない書籍の中で、約40%が体操と装具の作製方法で占められている。

Dr. Blount が体操をいかに重視していたのか、また装具の作製にいかに力を入れていたのかがわかる。内容は古いが、文章の随所から側弯に対する熱意が感じとれる。また患者に対する思いやりと側弯症の深い蘊蓄を読み取ることができる。

2019/10/16

本書も、そのようになればと思っている。ただ、思い込みや独りよがりがあるかもしれない。これは読者が読んで感じ取って判断していただきたい。

著者の意図を組んでいただけると幸いである。

令和元年 9 月 吉日